

令和2年度子供・若者施策調査研究会（第2回）議事要旨

1. 日時：令和3年2月25日（木）10:00～12:00
2. 開催方式：オンライン開催（Zoom ウェビナー及びYouTube 配信）
3. 講師  
特定非営利活動法人 SET 理事長 三井俊介 氏  
一般社団法人 歓迎プロデュース 理事 根岸えま 氏  
一般社団法人 まるオフィス マネジャー 矢野明日香 氏  
一般社団法人 ふくしま学びのネットワーク 理事・事務局長  
／ 福島大学特任准教授 前川直哉 氏
4. テーマ  
東日本大震災10年 被災地の子供・若者の歩みと現状

（事務局：中央合同庁舎第8号館5階共用C会議室）

瓜生田ゆき 調査官（青少年企画・支援担当）

## 5 . 概要

瓜生田調査官

ただいまから令和2年度第2回目の「子供・若者施策調査研究会」を開会いたします。私は、本日の司会進行を務めます内閣府の瓜生田と申します。内閣府青少年企画担当とともに本研究会の事務局を担っております。どうぞよろしくお願いいたします。

内閣府におきましては、日本の子供・若者を取り巻く現状や最近の研究成果などに関して、様々な切り口からテーマを設定し、有識者や現場の実務家の方々から御講演をいただく機会を毎年数回設けております。

今年度第2回目となる本日の研究会では、2011年3月11日の東日本大震災から10年の節目ということもあり、震災後の変化やこの10年の被災地における取組について知ることを通して、子供・若者にとって大事なこと、必要なことを考えていきたいという目的で、「東日本大震災10年 被災地の子供・若者の歩みと現状」というテーマを設定し、講師として、岩手県、宮城県、福島県にお住まいで、それぞれ長期間にわたり復興支援や地域づくり、子供・若者への支援活動、人材育成等に取り組まれている実務家の方々にはリモートでの御講演をお願いいたしました。

お忙しい中をお引き受けいただいた講師の皆様には、改めまして厚く御礼申し上げます。ZoomウェビナーまたはYouTubeで御視聴いただいている皆様も、現場で力強く前向きに活動されている講師の方々のお話から刺激やメッセージをたくさん受け取って、今後の御自身のお仕事や活動につなげていただければ幸いです。

続きまして、本日の流れについてです。本日は全体で2時間弱を予定しており、プログラムは事前に御案内したとおりです。

この後、10時10分から、特定非営利活動法人SET理事長の三井俊介様からの御講演、10時45分から、一般社団法人歓迎プロデュース理事、かつ、唐桑半島ペンターン（「半島」を意味するペニンシュラと、「移住」を意味するターンを掛け合わせた造語）女子の根岸えま様、また、一般社団法人まるオフィスのマネージャー、かつ、唐桑半島ペンターン女子の矢野明日香様の御講演、11時25分から、一般社団法人ふくしま学びのネットワーク理事・事務局長で、福島大学特任准教授でもいらっしゃる前川直哉様から御講演をいただき、12時をめでに閉会の予定です。

それでは、これから講演を開始していただきます。

まずは、特定非営利活動法人SET理事長、三井俊介様から、タイトル「人口が減るからこそ豊かになる人づくり・まちづくり・社会づくり～陸前高田市広田町での挑戦～」という御講演をいただきます。

三井様、御準備ができましたら始めてください。よろしくお願いいたします。

三井氏

「人口が減るからこそ豊かになる人づくり・まちづくり・社会づくり～陸前高田市広田町での挑戦～」というテーマでお話をさせていただきます。特定非営利活動法人SET理事長を務めています三井俊介です。よろしくお願いします。

簡単に自己紹介ですが、私自身は東北に縁もゆかりもなかった人間でして、1988年、茨城県つくば市生まれです。大学時代は主に国際開発協力の分野を専攻していきまして、途上国の人たち、特に貧困地域の人たちがどのように経済的に自立的に発展していくかということや、あとは自身で団体を立ち上げて活動するということをしていました。また、社会起業大学という民間のビジネススクールですが、日本で唯一ソーシャルビジネスを専門に扱うビジネススクールに在学中から通っていました。

2011年3月13日に、震災支援の関係でSETを設立します。その翌年、大学を卒業して、そのまま単身、陸前高田市広田町に居を移しました。

その1年後の2013年にはNPO法人化して、理事長に就任いたします。2年後、2015年には、町の方々からの応援、後押しを受けまして、陸前高田の市議会議員選挙に立候補して、無事に当選させていただきました。その2年後には、陸前高田市の移住定住を一本にした窓口機能を持つNPO法人高田暮舎の設立を行いまして、フェローに就任しました。

2019年9月には、陸前高田の市議会議員が1期4年になりますので、その任期満了に伴って私自身は退陣し、後継に譲り、後継が無事当選をして、議員生活を終えるという形になります。

昨年の4月より宮城大学院に進学したとともに、2つの大学で教鞭を執るという形で、現在、アカデミアの力を強めているような状況になっています。

家族は、東京から一緒に移住してきた妻と3人の子供がいるという形になっています。

組織概要です。SETは、どんな社会をつくっていくかということ、一人一人の「やりたい」を「できた」に変え、日本の未来に対して「Good」な「Change」が起こっている社会を創るというふうにしています。

そのために何を行うかということ、人口が減るからこそ、豊かになる人づくり、まちづくり、社会づくりを、これからの時代を生きる20代、30代の私たちが当事者として取り組んでいくということをしています。

東日本大震災で被災した、特に陸前高田の広田町という一つの町で活動しているわけではありますが、この町だけがよくなればよいと思って私たちは活動しているわけではありません。東日本大震災で被災した沿岸地域は、日本の50年先の課題を先取りしている課題先進地というふうにも呼ばれています。ここでの課題の解決、ソリューションは、これからの日本の未来に対して必ず必要になるものであるということを私たちは信じて活動しています。

その中で、人口減少していることが問題だとよく言われたりするのですが、人口減少していること自体は問題ではなくて、急激に減少することで起こる人々の価値観が間に合わ

ないこととか、町の仕組みとか機能をつくり直さなければいけないことに危機感を覚えています。人口が減ること自体は止められるものではないと感じていますので、人口が少なくなる中でどのように人々の価値観を転換させ、そして社会の仕組みや町の仕組みを人口が少ない状態で保つか、よりよく生きていくかということにフォーカスを置いて活動しています。

現在では206名の所属メンバーがおりまして、首都圏の大学生、社会人、あと、現地に移住しているメンバーで構成されています。

広田町の場所と雰囲気を少しだけお伝えできればと思うのですが、緑の部分が宮城県気仙沼、ピンクの部分が岩手県になっています。紫の部分が陸前高田市になっておりますので、岩手と宮城の県境にあります。その突き出た半島部分、この赤丸で囲まれているところが広田町という場所になります。

半島ですので、このような海と、あとは山あいのところに家があるという状況で、皆さんは家庭菜園をされて半自給自足的な生活を営まれています。メインは養殖のワカメやカキ、ホタテなどの漁業になっています。

家はこのような古民家が多くあります。

地域の伝統文化を大切にします。これは2年に1回ある地区のお祭りなのですが、この20メートルのはしごに命綱なしで上って虎舞をするというような伝統芸能などがあります。私もこのはしごの上に上らせていただいています。

これまでの実績としましては、広田町は人口約3,000人なのですが、知り合いゼロから私たちは活動をスタートしましたが、現在では800名以上、人口の3分の1ぐらいの皆様と交流の事業に参加していただいています。

また、毎年300人の若者が、ただ観光で訪れるということではなくて、1週間以上活動する、まちづくり活動をするという仕組みを形成してきました。現在では移住者は40名を超えて、毎年増え続けるような仕組みとなっています。

また、民泊の修学旅行誘致事業を開始したわけですが、この4年間で東北最大規模にまでなりました。

最近ではよく言われていますが、Well-beingを高めるような学校づくりを行っているのですが、日本で唯一、幸福とかWell-beingで世界で上位の国、デンマークの教育機関と本格的な連携を確立して学校づくりを行っています。

これまで様々な賞をいただくことができました。最初のほうは復興の文脈だったのですが、だんだんとまちづくりとか、そういうふうな全国的な賞をいただけるようになりました。

そもそも、SETがどのようにして活動を進めてきたのかということについてお話をさせていただきます。

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。当時、私は大学3年生で、東京に住んでいたわけです。携帯の電波もなくなって、電車も止まり、5時間ぐらいかけて歩いて家

に帰ってテレビをつけたとき、初めて東北地方に津波が来たことを知りました。助けを求めている人が多くいるのだったら何かできることをしよう、そういう思いで3月12日に友人たちと集い、3月13日にはSETを立ち上げて活動を開始しました。ただ、何からすればいいのか、当時は全く分からないという状況でした。

立ち上げて2日後に、テレビで死傷者、行方不明者の方が一気に1,000名以上にはね上がるという報道がされました。困っている人がいるのだったら何とか力になろうと思って立ち上がったわけですが、何もできないまま、苦しんでいる人がい続けるということに、ただただ悔しくて一人トイレで泣き崩れたのを今でも覚えています。

ある御縁をきっかけに陸前高田市広田町という町と出会いました。ここは、4月6日、震災から3週間後に初めて現地に入ったわけです。そこで2週間、一生懸命活動したのですが、自分たちにできたことって何かあったのかな、自分たちの力が小さ過ぎてすごく不安になり、無力感を味わったことを覚えています。

一方で、町の方々からは、この大変な時期におまえらみたいな外からの人が来てくれたおかげで笑顔で過ごすことができたぞという声や、家族みたいなものだからいつでも帰ってこいよという温かい声をいただき、自分たちにできたことは小さかったけれども、確かに目の前のこの人たちの役には立てたのだという実感を得ることができました。

私たちは、たまたま出会った陸前高田市の広田という町だったのですけれども、この町でこれからも活動していこうということを決めました。そして、私は大学を卒業して移住をしまして、2012年からこの活動をさらに進めていきました。

活動を通して大きな気づきを得ました。私たちの活動は、主に外から若者を呼び込んできて、町の方々と交流をして、双方がまちづくりの活動をしていくというふうな交流事業を通したまちづくりを行っていました。その交流を通して町の方から多くのものを学んだわけですが、一番大きく学んだのは、人はいつ死ぬか分からないということでした。

陸前高田市は甚大な被害を受けた市町村でして、12人に1人の割合で死傷者、行方不明者の方々がいらしゃった地域になります。もしかしたら自分だったかもしれない、でも自分は運よく助かった、この生かされた命を大切にしたい。町の方の言葉です。だからこそ今を一生懸命生きたい、自分にとって豊かな生き方をしていきたい、そういうふうに強く思うようになっていきました。そして、これは僕だけでなく、若者たちにとっても重要な学びであると思いました。

一方で、私たちのような若者との交流は、住民の皆さんにとっても価値があることだったということを知りました。町の方々からは、孫が増えたみたいで楽しいね、家族の中であなたの話題がよく出て家族の会話が増えて明るくなったよ、俺らが知らないことをおまえらは知っている、凝り固まった町の方の思考を変えてくれなどの声をいただきました。町の方々にとっても若者との交流は、日々の生活の楽しさや新しいことを知るきっかけになっています。つまり、双方にとって交流は素晴らしいことだということが分かりました。

さらに、これは奇跡的な出来事だなと思うのですが、両者にとって素晴らしいだけでは

なくて、なおかつそれが町の活性化にまでつながっていったということがあります。

陸前高田市広田町、人口3,000人の町に、年間2,000名以上の若者がまちづくり活動で今訪れています。町民の800人がまちづくり活動に参加し、これまで40名以上が移住してきた。移住者が増えるということは、地域のコミュニティの活性化につながります。お祭りの担い手がいないという中で、私たちのような移住者がお祭りの担い手を行わせていただくこと、地域の小さい困りごと、例えばおばあちゃんが荷物を運べないということさえ、私たちのような移住者はお手伝いをすることができます。そういう移住者が触媒となって町の人同士をつなぎ合わせていく。そこでコミュニティが活性化していくということが起こっていきました。

ただ、本当にコミュニティが活性化したのか、住民に対してどんな価値があったのかというのは、証明すること、説明することがなかなか難しかったわけですが、昨年度、陸前高田市と共同で大規模なアンケート調査を実施しました。

右上のところに概要があるのですが、広田町の995世帯、全世帯に対してアンケートを配布しまして、16%の回収率を得ることができました。また、交流を行っていた若者に向けてもアンケートを行いました。

町の方のアンケートでは、交流事業に参加したことがある人と参加したことがない人での単純比較を行いました。若者に対しては、1週間来た短期滞在者と、スタッフとして半年以上、町に通い続ける関係人口となった人たちという形で比較調査を行っていきました。

ここで本当に交流に価値があったのかというものを数値化していったわけですが、まず一つ分かったこととしては、交流がある人となない人では、交流がある人のほうが日々幸福を感じている度合いが高かった。

どのようなことが起因しているかといいますと、地域社会とのつながりがあるというものや、周りの人に認められている、自然に恵まれている、地域の歴史や文化に誇りが持てるという数値で、交流がある・ないではある人のほうでは高くなりました。

これは、若者たちが来ると、「海がきれい」とか、「お祭りを大切にされているんですね」など、町の自然の恵みや伝統への投げかけ、気づきを提供します。そうすると、町の方々は、当たり前だと思っていたものが価値があることなんだという気づきを得ます。そういうことから、周囲から認められている、社会とつながっているという実感が増され、地域に住んでいる誇りが取り戻され、全体的な幸福感が高まっているのだと考察されます。

2つ目が社会関係資本に関する調査、いわゆるソーシャルキャピタルと呼ばれる町の豊かさを測る一つの指標になります。こちらにおいても、交流がある人となない人では、ある人のほうが高い数値、ソーシャルキャピタルを向上させるのに貢献しているというふうなデータが出ました。一般的な人を信頼するという一般信頼は人々の協力関係を生み出し、豊かな社会生活を営む上で大事とされています。外部の若者と交流することで、一般的な信頼が高まっていくということが推測されています。

最後は社会への貢献意識に関する調査でして、地域の自然環境の保全について、町の伝

統文化について、人の成長や教育、そしてこの町での生活の次の世代への継承というものに関して、交流がある人となない人では、ある人のほうが具体的に貢献している、または貢献したいと思っているという度合いが高くありました。

つまり、ここから言えることは、交流はその本人たち同士の価値だけではなくて、社会にとって、町にとって価値があるということが一つこれによって証明されました。

若者にどんな価値があったのかと聞いてみると、様々な価値観に影響を与えているというのがあるわけですが、半年以上関わったスタッフについては、豊かさについての捉え方が変わったということや、田舎、地方の問題を自分ごとと捉えられるようになったということなどがあります。また、田舎移住という選択肢を考えるようになったというものに関しても、かなり差が出ています。

また、若者たちの言葉からテキスト分析をしたわけですが、1週間滞在した人は活気が増えたねという言葉が多かったのですが、半年以上関わっている人たちは、増える、何かしら町が変わっていく、変化しているということに対しての実感を得ていることが分かりました。また、若者たちも、社会への貢献意欲や貢献行動で言うと、自分の地域に帰ってから貢献するなどの具体的な行動が増えているということが分かりました。

これらのことから、交流事業は、住んでいる方や若者にとって、町のために何かしたい、社会のために何かしたいという気持ちが大きくなり、結果として町のために行動する人も増えるし、社会のために行動する人も増えるということが分かりました。

では、そもそもなぜ交流事業にこれまで力を入れてきたのか、被災地のどのような課題に私たちはアプローチしてきたのかについてお話しさせていただければと思います。

まず、これは2013年当時、私が移住したのは2012年ですが、そのときにどの課題にどういふふうアプローチしていこうかと色々考えたわけです。被災地には多くの課題がありました。高台移転によるコミュニティの問題とか、若者が流出していることや、教育の問題、高齢化、様々な問題があったわけですね。

これをどう解決しようかと考えていたわけですが、ふとある日思ったのです。これって誰が解決するんだって。本当にすばらしい解決策ができたとしても、日本全体が2100年には5000万人になるのに、このすばらしい解決策だけあってもしょうがないんじゃないかと。そう考えたときに、このような社会的な課題を解決したい、このような社会的な課題に取り組みたいと思う個人を育てていかなければ、結局すばらしい解決策を考えたとしても、これはどん詰まりになってしまうのではないかと思います。

広田町にはこういうふうな様々な問題があるわけですが、なぜ広田町の課題解決に人が動かないのか、その課題を解決したいと思う人が増えていかないのかということ进行分析してみると、このような負のループが回っているのではないかと思います。

まずは、人は減っていくし、仕事は少なくなっていくということは、皆さん、町の方々の言葉からも分かることなんですね。隣の息子が帰ってこないらしいぞ、あいつは外に出ていった、そういう話を聞くわけですね。あそこの家はワカメの養殖をやっていたけれど

も、今年で跡継ぎもいないからやめるらしいと。

ただ、40代、50代のときは日々の生活がいっぱいなので、そういうことが分かっているにもかかわらず、何かそこに問題解決に取り組むということはなかなか起こりづらい。60代以上の定年退職した皆さんが、このままだと広田は大変だ、よし取り組もうと思うわけですが、もう60代を過ぎていると御自身も高齢化していて体力がなくなっていることや、地域特有のしがらみなどから一緒にやる人がいないという状況になっていきます。一緒にやる人がいないと、自分だけ取り組んでも無理なんじゃないかということで諦めて希望を失ってしまう。そういう高齢者の方が若者たちや孫たちに、この町は駄目だ、もう出ていったほうがいいんだという声を投げかけてしまう。そうすると、さらに若者たちは、この町は駄目なんだということで出ていってしまう。こういう悪循環が回って、広田のためにと活動する人が少ないということが起こっていたと思います。

そこで、私たちが取ったソリューションは、外部からの刺激と応援を入れ続けることで、町のためにと活動する住民を増やす。つまり、一緒にやる人がいないという部分に対して、私たち外からの若者たちはまず一緒にやる人になれたわけですね。そうすると、町の方々の小さくてもやりたいという思いを「一緒にできた」に変えることができる。そうすると、諦めて希望を失っていたところから希望を取り戻して、これもできるんじゃないか、あれもできるんじゃないかという様々な取組が生まれてきます。

その中から、こういうふうなことがあった、こういう仕事をつくらうとって新しい仕事ができたり、これだけ魅力的なことがあるのだったら移住したいです、外に出ないでとどまりたいですという若者たちが生まれてきて、人がだんだんと増えてくる。そういうふうにして、プラスのループを回していくということを私たちは行っていました。つまり、交流を通した人づくりを行っていたということになります。

交流を通したまちづくりは、本当に様々な取組をしてきたのですが、簡単に御紹介させていただきます。1つが中高生向けのキャリア教育で、地元の中高生向け。民泊事業は外の中高生向けで、修学旅行を誘致するというものになります。中高生のうちに町への愛着というか、種まきをしておきまして、彼らが大学生になったときにまちづくり活動に参加できるような、Change Maker Study Programという1週間滞在型のスタディツアーを行っていました。

移住したいという形がだんだん生まれてきて、そういう子たちが気軽に移住できるような4か月間のスクールとして、Change Makers' Collegeという移住スクールを行っています。

ちょっとここら辺は背景があったのですが、少し飛ばしていきます。

さっきのような事業を行ったことで、現在、定住している若者たちはこんなような形になっていまして、交流事業、移住事業、あとは一次産業やコミュニティなど、本当に多様な仕事を生み出し、取り組んでいる若者たちがいます。

そして、地元出身の若者たちも、それぞれ大学に進学したり、就職したりしているわけ



ですが、その後も私たちのまちづくりの活動に関わり続けてくれています。

この結果、どういうふうな数字的なものがあったかという、2010年の広田町の20～39歳は536人で総人口の15%だったところ。この時点では、2020年には20～39歳は426人に減って14.3%になると予測されていました。この年代が減るとことは町にとって致命的です。ただ、私たちのこれまでの活動を通して移住者が増えてきた結果、実際は444名。住民票をまだ移していない移住者もいますが、足すと451名で15.1%、10年前から20～39歳の本当にこれからの世代の人口比率をまずキープすることができたということになります。

若者の人口比率が高いことは、町の存続のキーポイントになると思っています。新しいチャレンジが生まれ、新しい仕事生まれ、経済活動も活発になり、伝統を残し、そして次世代が誕生するという様々な効果があります。

そういうふうにしながらか活動を進めてきたわけですが、そこでコロナが起こってしまう。私たちは交流事業を行っていたので、一切合切、今は中止になっているわけですが、その間、移住しているメンバーたちで話し合いを重ねていきました。

では、コロナ時代でどういうふうに社会が変わっていくかという、多くの方が働き方だけでなく暮らし方に目を向ける機会になった。であれば、この田舎町で本質的に豊かな働き方や暮らし方をつくり出していくということに私たちはチャレンジしていくべきではないかということで、この1年間は町の中でのライフスタイルをつくり変えることを行ってきました。

町の方々と何度も小さい勉強会、大きい勉強会を開催し、そして地産地消を後押しするような取組をスタートします。そのほかにも、古民家カフェを行ったり、漁業権を取得して漁業を開始する移住者がいたり、あとは地元食材を使ったお食事会や、シーグラスなどを使った地元商材づくりなどを行っています。

先日、『TURNS』という全国的な移住定住の地域誌ですが、そこにも大きく掲載していただきました。そこで、私たちの考える新しい豊かな暮らしみたいなものがあるのですが、最後にここだけお話をさせていただければと思います。

これがSETが考える新しいコミュニティの形ですが、昔は村社会で、助け合いや安心感はあるが、関わらない自由は担保されていなくて、しがらみが強くなるという、共生する、人とともに生きるが、不自由であるという時代がありました。

高度経済成長を経ての段階で、都会に若者たちは自由を求めて出ていきます。都会暮らし、核家族化が進んでいきます。確かに自由は手に入れたが、孤独になっていって、社会から関係性が失われ、効率化が促され、お金がよりどころになった。自由になった結果、孤立してしまうというふうになりました。

私たちが今この町で本質的に豊かな暮らしとして捉えているのは、ここの部分になります。他人とともに自由に生きるというような、こういうコミュニティや暮らしの在り方というものをつくっていくことが、この被災地から日本全体に発信していく一つの大きいメ

ッセージになるのかなと思っています。

ちょっと時間が延びてしまい、駆け足になりましたが、以上になります。御清聴、ありがとうございました。

瓜生田調査官

三井様、ありがとうございました。

それでは、まずQ & Aの御質問を私から読み上げさせていただいて、それに三井様からお答えをいただくという形で進めていきたいと思います。

「継続的な御活動、そして本日の貴重な御発表、ありがとうございます。社会資本や幸福度に関する調査結果を興味深く拝見いたしました。調査結果に年代や性別での差異はありましたでしょうか。」という御質問です。

三井氏

アンケートを全世帯に配布したわけですが、田舎の事情を勘案していただければと思うのですが、基本的に家主の方が答えるというものになります。そうすると、核家族がこの町だと少ないので、答える方々は基本的に60代、70代、いわゆる一番上の人になりますので、年代層として60代、70代しかほぼ取れていないという状況になっていまして、20代、30代、40代というのは比較できないぐらいの量しかなかったということになります。ですので、年代や性別での差異は今回の調査では分からなかったというのが正直なところになります。

ただ、今、このアンケート調査後にヒアリング調査を実施していきまして、その報告書が夏までには発行されますので、そこら辺も見ただけだと思います。また調査結果も、調査報告書と詳細版というものをSETのホームページにアップロードしておりますので、御興味があれば、よければ見ていただけたらなと思います。

瓜生田調査官

ありがとうございます。実際に調査されているということで、すばらしいなと思います。続きまして、事務局の会場から一つ質問をしてもらいたいと思います。

寺本参事官

内閣府の寺本と申します。かつて復興庁に勤務しておりまして、三井さんには本当にいつもお世話になっております。ありがとうございます。

私から一つ質問させていただければと思います。4か月間の移住型Well-beingスクールの話があったかと思うのですが、4か月という期間の中で、どういう方が参加されていて、実際に参加された後、どういうふうに変わっていったのか、という話がもしありましたら教えていただければと思います。

三井氏

4 か月間のWell-beingスクール、Change Makers' Collegeは、現在までに5期開催しております、合計で30名以上の皆さんに御参加いただいています。参加者は、基本的には30代以下の方々が多くて、学生が半分ぐらい、2～3年目の社会人の方々に辞められて来る方が半分ぐらいという比率だったとだけ思っています。

30人ぐらいの中で10人ぐらいがそのまま定着をしている形になっていて、20人ぐらいはそれぞれの地に帰っていくというふうな状態に今はなっています。

4 か月間は、日本の中では少ないかもしれないですけども、私たちは若者の社会保障だと捉えていて、デンマークだとそういう立てつけなのです。若者たちが、就職でもない、学びでもない、立ち止まって自分のことをしっかり考える期間として、デンマークではフォルケホイスコーレという学校が置かれているわけですが、私たちもそれと同じような考え方を持っていますので、その4か月間で若者たちが働きたいというよりは、どちらかという自分を見つめ直して、自分は本当に何をしたいのか、社会とどう距離感を取って、どう存在したいのかということじっくり思考する、対話をしながら考えていくという期間になっています。

なので、そこら辺のデータも後々公開はできるかと思うのですが、具体的なものとしてはWell-beingサークルというものがあるのですが、そのサークルが、1か月目、2か月目、3か月目と落ち込んでくるのですが、4か月目でかなり広がるというふうな形で、それぞれが自分の幸福とは何か、Well-beingとは何かというものを捉え直して、実践を少しできるという状態まで4か月で進行するのかなと思っています。

瓜生田調査官

そのほか御質問は寄せられてはいないようなので、ここで予定されていたお時間になりますので、終了に、と思いますが、その前に三井様から最後に一言メッセージをぜひお願いできればと思います。

三井氏

講演の最後につけていたものはあったのですが、この10年間で私自身が強く感じているのは、本質的な豊かさとは何かというものをすごく考えさせられ、それを一つずつつくっていくということをこの町から取り組んできたなと思っています。

高度経済成長時代はお金を稼げば豊かになれるという価値観が広がったと思うのですが、私たちの30代前半の世代や今の20代は、その高度経済成長を知らず、バブルを知らない世代になります。その中で失われた20年と呼ばれているわけですが、僕らからすれば別に失われてもなくて、その当事者として生きてきて、少しずつ自分たちの豊かさを積み重ねてきた世代だなと思っています。

今、コロナ時代もあって、都会での暮らし方とか、サステナブルとか、いろいろ騒がれ

るようにもなっていますが、一人一人が自分にとっての豊かな生き方は何かというものを捉え直すことが今後すごく大事になると思いますし、そのヒントは、被災地だけでもないですが、田舎にかなり隠れているなということを感じています。

なので、また、都会の皆さんも含めてですが、交流をしながら、何が自分たちにとって豊かなのか、日本がどういうふうになったら豊かになるのかということのをこれからも一緒に考えながら行動していければなと思います。

本日は貴重な機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

#### 瓜生田調査官

こちらこそ、お忙しい中、すてきな資料を用意していただきまして、たくさんの笑顔の写真を見せていただきまして、熱意や臨場感も伝わってきました。説得力のあるお話で、子供・若者を巻き込んで、これからどう生きていくのか、どういう社会をつくっていくのかということを考えていかれるということがよく伝わってきて、とても参考になりました。また、資料の中にあった若者は、いわゆる田舎暮らしだけではない、都会の人がイメージする田舎暮らしだけではないところがすごくよく分かりました。私たちも本質的な豊かさを考えていきたいと思います。

それでは、ここで三井様の講演を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

続きまして、2グループ目の講演に移らせていただきたいと思います。

次の30分間は、一般社団法人歓迎プロデュース理事で、唐桑半島ペンターン女子という肩書をお持ちの根岸えま様、一般社団法人まるオフィスのマネージャーで、同じく唐桑半島ペンターン女子でいらっしゃる矢野明日香様のお二人から、「気仙沼で20代を過ごした私たちが見てきたもの、感じていること」というタイトルで御講演をいただきます。

根岸様、矢野様、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 根岸氏

このたびは、皆さん、お忙しい中、どうもありがとうございます。歓迎プロデュースの根岸えまです。今日は、私は一プレーヤーとしての事例として前半御紹介させていただいて、後半に矢野のほうから、中間支援的に町全体の若者の動きだったり、そのほかのプレーヤーの事例を紹介してもらいたいなと思っています。なので、前後半を合わせて30分ぐらい、どうぞお付き合いください。よろしくお願いいたします。

まず、私の自己紹介からさせてください。

私は、今、気仙沼の魚市場の前で、漁師さんたちのための銭湯と食堂、鶴亀の湯、鶴亀食堂というのを運営しています。本当に魚市場から歩いて3分ぐらいのところにあります。

実は私は、もともとは気仙沼とは縁もゆかりもなく、東京都出身です。東京生まれ、東京育ちで、大学生までずっと東京に住んでいました。大学生のときに東日本大震災が起

こって、学生ボランティアとして初めて来たのが気仙沼でした。そこですごくたくさんの方を見て、たくさんの方を感じるのですが、そこで出会った人たちにすごく突き動かされました。海とともに生きてきた人たちの生きる強さだったり、津波で船が流されてもまた一から漁を始める人たちや、被害を受けても、それでも海が好きと言って海で仕事をする人たち、そして、前を向いて町を、漁業を、自分の手で何とかしたいと強く生きる人たちに出会って、私は初めて、19歳のときだったのですけれども、カッコいい大人と出会いました。

大学時代はずっと定期的に通っていたのですが、大学を卒業するタイミングで移住を決めました。実は就職も決まっていたのですが、悩みに悩んで、やはり私はあのカッコいい大人たちと一緒に働きたいと思って、2015年、丸6年たちますが、移住しました。

今は、ほかにも一緒に移住した女の子たちと4人で、唐桑という市街地から30分ぐらい行ったところでシェアハウスをしています。

ここで気仙沼の紹介をさせてください。

気仙沼は、この前のプレゼンがあった岩手県陸前高田市のお隣です。本当に岩手と宮城の県境にある人口6万人の漁業、水産業の町です。昔から遠洋マグロ船の基地として栄えていて、世界の海にマグロを捕りにいく船が寄港する港町として栄えてきました。

ここからは、私が気仙沼で10年を過ごして感じたことと、今やっている鶴亀の湯・鶴亀食堂の話をしたと思います。

まず、10年間ここに通ったり、住んだりして活動する中ですごく感じたのが、気仙沼の経済は魚市場から始まっているということです。魚市場で魚を買う仲買人さんをはじめ、箱屋さん、氷屋さん、流通・運送業、小売業、飲食業、そして観光業までもがこの魚市場の水揚げによって支えられているということです。カツオはいつも毎年6月ぐらいに初水揚げがあるのですが、初水揚げがある日は町中が喜んで、例えばサンマが不漁の年は町中の雰囲気すごく落ちる、そんな空気をこの10年間感じてきました。

しかし、実はその魚市場の水揚げの7割は県外の船によるものです。遠くは宮崎、高知、三重、富山や北海道など、日本全国から三陸沖漁場で漁をして、気仙沼港に皆さん水揚げをしてくれます。その漁師さんたちは、1年の半分以上は気仙沼に入港して過ごす人もいます。

もう一つの気づきとして、これは私も気仙沼ならではのと思うのですが、港町には漁師さんたちのための銭湯が必要だということです。今話した県外から来る漁師さんたちは、ふだんは船で生活をしています。でも、お風呂は船内の狭い海水風呂なのです。そのため、港に入ったときは水のお風呂で手足を伸ばして入りたいという声がよく聞かれます。

実は、4年前まで、港のすぐそばに亀の湯という銭湯がありました。130年ぐらい続く、古い、本当にいい銭湯だったのですが、防潮堤工事のためにそこがやむなく閉店し、それ以降、漁師さんたちが歩いて行ける銭湯がなくなりました。そこで、気仙沼で漁業に関する仕事をやっているおかみさん2人と一緒に立ち上げたのがこの鶴亀の湯・鶴亀

食堂です。

ただ、銭湯をゼロから造るというのは莫大な資金が必要でした。そこで考えたのが、低コストでできるトレーラーハウスの銭湯でした。

さらに、今の時代、銭湯だけで経営というのはなかなか成り立ちません。そのため、銭湯の隣に番台代わりになる食堂を併設しようということで、鶴亀の湯・鶴亀食堂として2019年7月にオープンしました。今は水揚げ後の漁師さんが入れるように、朝7時から営業しています。

中はこんな感じです。

銭湯は本当にたくさんの漁師さんたちに御利用いただいています。特に県外の漁師さんたちが入るのは5月ぐらいから11月ぐらいの夏から秋の期間ですが、その期間はこの気仙沼はすごく栄えています。

また、隣の食堂では、その日の朝に水揚げされたカツオやマグロなど、新鮮な朝御飯を食べられる。そして、そこには風呂上がりで一杯やっている漁師さんたちがいたりして、漁の話聞きながら、その人が捕った魚を食べられる、そんな場所になっています。

こんな朝御飯をカツオの時期は出しています。

時には、漁師さんによる魚のさばきショーをやることもあります。こうやって観光で来た人たちも、地元の人たちも、実は今までなかなか漁師さんって会うことがなかった人なんです。その人の話を聞きながら、捕れたての魚を朝から食べられる。

漁師さんたちにとっても、今まで自分が捕った魚を食べてくれる人の顔というのはなかなか見たことがなかったのですが、ここで隣に自分が捕った魚をおいしそうに食べてくれる人がいる、そして、お風呂にゆっくり入って体の汗を流して、また笑顔で沖に行ってくれる、そんな場所に今はなっています。

あれから10年、私は20代をこの町で過ごしてきて、たくさんのかっこいい大人と出会いました。そして、気仙沼は本当に魚の水揚げがあつての町だということ。その下にいるのは漁師さんたちだということ。町の宝である漁師さんたちを大切にしたい。私たちは気仙沼を日本一漁師さんを大切にしたいと思って活動しています。

最後になりますが、19歳で10年前、初めて気仙沼を訪れたときは、自分が10年後に銭湯と食堂の運営をしているとは夢にも思いませんでした。でも、その時々々に気仙沼で出会った人たちに突き動かされて、地元の人たちに本当にたくさんのことを教えてもらいながら、その時々、自分のできること、やりたいことをやってきたら、いつの間にか今こうなっていました。

そして、気仙沼には私のように目の前のことにわくわくしながら挑戦する移住者や地元の人、高校生もたくさんいます。後半は、その取組について矢野からお伝えしたいと思います。よろしくお願ひします。

矢野氏

ここからは私のほうから、そういう若い人たちのチャレンジが生まれている町の全体的様子についてお話しさせていただきます。

まず、自己紹介をさせていただきます。一般社団法人まるオフィスの矢野明日香といたします。岐阜県岐阜市出身で、いろいろな経緯を経て2016年に気仙沼に移住しました。私も唐桑に住んでいるペンターン女子の一人で、多分最年長かなと思います。

私が移住したきっかけは、震災きっかけというよりも、単純に田舎暮らしがしたい、生きる力を身につけたいということで気仙沼に移住しました。なので、ペンターン女子の一人しては、休日に畑をしたり、鶏を飼ってみたり、野菜のスープを作ってイベントで販売したりという形で、田舎暮らしを満喫しています。

そんな私はまるオフィスでは仕事で、若い人たちがまちづくりに関わるきっかけづくりということで事業を行っていますので、今日はそちらのまるオフィスの活動を御紹介させていただきます。

私が関わっているのは気仙沼市担い手育成支援事業というもので、気仙沼市が主催をして平成25年度からスタートしている、若い人たちのまちづくりの担い手を育成するという事業です。

これが最初始まったころは、震災をきっかけに若い人たちのまちづくりへの興味、関心が増えたというところの町の様子の流れから、ではもっと若い人たちが町へ関わっていただけのようなきっかけをつくるということで始まりました。

今10年がたって、気仙沼市の町全体としては「市民が主役のまちづくり」というのを掲げていて、人づくりにとても力を入れています。若い人たちだけではなくて、若手経営者の方、シニアの方、女性向けにも人材育成塾をやっておりまして、その人づくりというところの一つとして担い手事業も大きな軸となっています。

この担い手事業を一言で表すと、10～30代の若い人たちの「やりたい！」を応援する事業です。地域にこういう課題があるから、こういうニーズがあるから、こういうのを解決してくださいとか、事業を立ち上げてくださいとか、起業してくださいというようなものではなくて、私たちはそこに住む若い人たちのまず「やりたい！」という思いを一番大事にしています。ここからスタートすることを大事にしています。

私の思いとしては、やはり町に住む人たちが町をつくっていくので、その町に住む人たちの「やりたい！」を実際に地域でやってみて、それが続いていたり、それが大きくなったりして、たくさんの方が巻き込まれていって、気づいたら面白い町になっているというような、そんな状態をつくりたいなと思ってこの事業を続けています。

いろいろやっているのですけれども、今日は若い人たち向けのぬま大学と、高校生向けのMY PROJECT AWARDの2つの事業を御紹介します。

まず、ぬま大学です。こちらは10～30代の若い人たちの「気仙沼で何かやってみたい」を形にする半年間の実践塾です。今年第6期を終了したのですけれども、6年間でこのよ

うな80の方が卒業をしていきました。そして、現在も地域の中で自分の思いを基に活動を続けていらっしゃいます。

彼らが何をするのかというと、半年間で自分が気仙沼で実行するプラン、マイプランというものをつくっていきます。

では、どんな様子かというのをまず見ていただいたらいいかなと思って、動画を御用意しました。

#### (動画上映)

今流したものは、今期第6期のダイジェスト版だったのですが、今期はコロナもあってオンラインという形でやったりしましたが、本来はオフラインで実際に対面で講義を行っています。月1回の講義があって、半年間ですけれども、先ほどの動画であったように、グループの中で自分の思いを話したり、質問を受けて、より考えたり、そこで自分を知っていくというような対話の時間が一番多くあります。

その中で、地域で既に活動している先輩の話聞いてヒントを得たり、実際に自分が地域でアクションをしてみても、振り返ることを通して、半年間、マイプランをつくっていきます。最後に最終報告会というのがあって、そこで地域の人前で自分のマイプランを宣言して終了していきます。

さらに、ぬま大学の特徴としては、既に地域で活動している若いプレーヤーの方たちがサポーターに入って受講生1人に1人ついて、半年間、マイプランをつくるのをサポートしてくれるというような手厚いサポートもあります。

では、そんな半年間でどんな活動が生まれたのか、少し事例を御紹介します。

1人目は高橋えりさんで、岩手県出身で、移住者です。今、地元の方と結婚して、1児の母です。彼女は、ぬま大学卒業後に個人事業主として事業を立ち上げました。

彼女は、町という単位で持続可能なライフスタイルを創出したいという思いがあります。なので、彼女は回転率の速い子供服、すぐ着られなくなってしまう子供服、皆さんの家庭の中のたんすにたまっていそうな子供服を地域の中で循環させたいということで、子供服のシェアサービスの「みんなのダンス」という事業を立ち上げて、今も活動しています。

地域おこし協力隊で昨年移住してきた彼は、ブレイクダンスという自身の得意なものを生かしてマイプランをしています。今は、子供向けのキッズダンススクールをこれから始めようとしています。

3組目、彼女たちは気仙沼市出身で、絶賛子育て中のママになります。彼女たちは当事者でありながら、より気仙沼のパパとママが子育てしやすい町になってほしいという思いから、出張託児サービスとか様々な活動を今やっております。

以上が気仙沼の若い人たちのチャレンジの様子です。

ここからは高校生のほうのお話をさせていただきます。

高校生のMY PROJECT AWARDというのは、気仙沼の高校生が何かやってみたいという思い



を実際にやってみる、プロジェクトというものをつくって高校生が活動しています。それを年に1回のアワードというところで発表するというのがMY PROJECT AWARDというものになります。

「学びの祭典」としているのが一つポイントなのですが、私たちは高校生のマイプロジェクトがどれだけ地域に貢献できるかとか、どれだけすごいかというのを見るのではなくて、高校生がマイプロジェクトをしてどういう学びを得て、どう成長したのか、そういうところをすごく大事にしています。なので、教育的観点というところからもアプローチしていますし、また、そういう高校生が自分の「やってみたい」をやってみて学びを得るということを地域でやってみることを通して、地域を知ったり、地域の愛着が生まれたり、そういうところの副次的効果も少し狙っているという事業です。

MY PROJECT AWARDでは、高校生が実際にこれまでやってきたプロジェクトを地域の人の前で発表したり、地域の人とつながったりしている場になります。これまで4年間やってきて、延べ69人の高校生が参加してくれました。

ここからは、この69人の中から1組の高校生のプロジェクトを簡単に御紹介したいと思います。

畠山瑛護君と吉城拓馬君という今高校3年生のお二人です。彼らがマイプロジェクトをやろうとした最初の発起人は、左側の畠山瑛護君になります。彼は高校1年生のときにマイプロジェクトをやってみてみたいと思ったのですけれども、そこで最初に着目したのが人口減少という課題でした。

では、この課題にどうアプローチするかとなったときに、彼は小さい頃からゲームが大好きだったので、そのゲームを掛け合わせて何かできないかとアプローチを考えたら、もう夏には「気仙沼クエスト」という気仙沼のゲームを作りました。これは検索していただく出てくるのですけれども、彼は気仙沼に実際にある建物だったり、町歩きできるような、それをドット絵で表現したゲームを作りました。

このときの思いとしては、気仙沼出身で気仙沼を出て行ってしまった人でも、ゲームを通して気仙沼を感じることができることを通してUターンへの促進につながったらいいなという思いから最初始まりました。

彼が1年生が終わって2年生になったときに、このプロジェクトを一人で続けるにはちょっと厳しいから仲間が欲しいと思って、先ほどの吉城拓馬君を仲間に入れます。吉城拓馬君はカードゲームがとても大好きだったので、2人で気仙沼のカードゲームを作りました。

このカードゲームは、実際に気仙沼に普通に町で暮らしている人たちをキャラクターに見立ててカードにして対戦するというカードゲームで、この絵もそうですし、カードのゲームのルールも2人で考えて作っています。

それまでやってきたマイプロジェクトを、気仙沼の高校生MY PROJECT AWARDではなくて、全国のバージョンでもMY PROJECT AWARDというのがあるのですけれども、そこにエントリ

ーしたら、昨年、MY PROJECT AWARD2019で文部科学大臣賞という最優秀賞を受賞しました。そのときエントリー数は751プロジェクトだったのですけれども、その中から1番を取ったプロジェクトになりました。

彼らの活動はそこで終わらず、3年生になっても活動をしていました。今年の活動としては、気仙沼の中で夏と言えばみなとまつりというお祭りがあるのですが、今年コロナでそのお祭りができなくなってしまったのですね。祭りができなくなったという状況を地域の人たちが悲しんでいる様子を見て、瑛護君と拓馬君が自分たちで何かできることはないかと考えたところ、「気仙沼クエスト」の中でみなとまつりを再現しました。

それも、お祭りってどういうものかと、町の人たちの祭りへの思いというのも実際にヒアリングをして、その聞いた思いもこういう出てくる人たちが語っていたり、すごく忠実にみなとまつりが再現されていました。

また、最近、先ほど作ったカードゲームを商品化してパッケージにして500円で売っているのですけれども、そんなこともやっています。発売当初は大人気で、すぐに売り切れてしまったので、今は増版しております。

そんな感じで、高校生も自分の「やりたい」を地域の中でやって活動しているなというのが気仙沼の今の状況だなと思います。

ここまでが高校生の御紹介だったのですけれども、最後にまとめをさせていただくと、こういう高校生とか若い人たちとか、そういうチャレンジが自然にあふれている町だなと今感じています。

何か若い人たちがやりたいと言ったら、応援してくれる人がいて、それができちゃうという感覚もあって、それを楽しんでいる若い人たちがたくさんいるし、若い人たちがやりたいと言ったら、地域の人が、いいね、それをやろうよと言ってすぐに応援してくれる、そういう雰囲気町の中にあって、どんどんやりたいことができる、わくわくするような町になっているのを私たちは感じています。

以上で、私のほうから町の様子と若い人たちの簡単な事例の御紹介となりました。少し早くなりましたが、ありがとうございました。

瓜生田調査官

お二人、ありがとうございました。とても楽しい活動ばかりで、私も行きたくになります。

根岸さん、本格的な質問に入る前に素朴な疑問なのですけれども、鶴亀の湯は女性用はあるのですか。

根岸氏

実は女性用もあって、ただ、それは法律で女性用も造らなければいけないということで、漁師さんに女性は全然いないんですという話をしたのですが、造ってくださいということで、2~3人で入れる小さな女性用もあります。事前に御連絡いただければ、(お湯を)

ためます。

瓜生田調査官

ありがとうございます。

漁師さんにとっては、朝早くから、夜明け前からお仕事をされて、体を使って、戻ってこられて、鶴亀の湯に入って、鶴亀食堂でおいしい食事をして、捕れたての魚を食べてということで、すごく贅沢だなと思っていて、私もいつかぜひ行かせていただきたいと思いながら聞いていました。

それでは、質問をいただいていますので、そちらにお答えいただきたいと思います。そのほか、今、御視聴の皆様、御質問がある方はウェビナーでお寄せください。今1件いただいている御質問です。読み上げます。

「生き生きとした御活動の御発表、ありがとうございました。若者をはじめ、多様な方々とともに御活動を展開してこられたことが伝わってきました。ともに活動してこられたコースや女性の意見や視点は、復興やその意思決定、政策決定に反映されているとお感じになりますか。活動に参加されたコースや女性が、活動に参加したことでまちづくりや復興の意思決定、政策決定に参加するモチベーションを高めたということはございますか。」という御質問です。

矢野氏

気仙沼の中で総合計画策定のワークショップがあったのですけれども、それにぬま大学とか、関わった方たちが積極的に参加するという様子はあって、なので、若い人たちの思いだったり、自分たちの活動を政策の中で意見を提言する機会も、今、気仙沼の中であるなど感じているし、そこの総合計画策定ワークショップに高校生も参加しているので、若い人たち、活動している人たちの思いを聞きたいというような町の姿勢もすごくあるなど感じています。それは女性も含めて、になります。

根岸氏

女性も、子育てママたちが子ども家庭課とワークショップをして、一緒に企画をしてやっていますね。

矢野氏

今、気仙沼の中で子育て環境の整備というのもすごく力を入れていて、市長も思いがあるのですけれども、女性がすごく子育て関係で活動している団体が増えてきたので、そういう人たちが集まって市役所の担当課の方とミーティングを重ねたり、イベントを開いたり、そういう動きは見えてきています。

瓜生田調査官

ありがとうございます。

女性にとっても移住しやすいというところで、唐桑半島ペンターン女子としての御活動もお二人はされているのだと思うのですけれども、そちらのほうは活動の内容を少し紹介していただくことはできますか。

根岸氏

ペンターン女子というのは、ペニンシュラターンといって、半島のことをペニンシュラ、ターンはUターン、Iターン、Jターンとかの移住という意味のターンを掛け合わせた造語で、私たちは自分たちのことをペンターン女子といって、どんどんこの半島に20代、30代の女子が増えてきているので、その子たちが日々の日常生活、暮らしの楽しさみたいなところをブログやSNSで発信しているのがペンターン女子の活動です。

これは、実はこの前のプレゼンをしてくれた広田半島も半島で、移住者がたくさんいるので、ぜひ広田半島にもペンターン女子と一緒にやろうと前からずっとアプローチをかけているのですが、恥ずかしがっているのか、なかなか首を縦に振ってくれないので、三井さん、どうかよろしくお願いします。

瓜生田調査官

まだ前の講師の方も残って聞いてくださっているので、ダイレクトにメッセージが伝わっているのではないかと思います。ありがとうございます。

そのほか、御質問はないでしょうか。あと数分、予定のお時間がありますけれども。では、会場から、寺本参事官、お願いします。

寺本参事官

私も、昨年1月に鶴亀食堂さんにお邪魔させていただきました。本当にありがとうございました。おいしかったです。

お二人に教えていただければと思うのですけれども、外から気仙沼にある意味「入って」きて、地元の方と関わるときに、気をつけていることがもしあったら教えていただければと思います。本当にうまく地元で溶け込んで活動されているのかなと思うのですけれども、一方で、多分いろいろ御苦労もあったのではないかと思いますので、もしその辺りのことがありましたらお聞かせいただければと思います。

根岸氏

私は、先ほど申し上げたとおり19歳のときに来て、右も左も分からず、まず話している言葉が分からずという状況で、浜のおじいちゃんたちが話している方言が分からないというところから始まったのですが、地元の人たちに学ぶという姿勢を今でもずっと持ってい

ます。

私たちは特殊な能力を持っているわけでもなくて、スーパーマンでもないので、地域を変えるみたいなことができるとは思ってなくて、地元の人たちがつくってきた地域があるので、それを学びながら一緒にこれから未来をつくっていきたいと思っているので、本当に学ぶ姿勢かなと思っています。

矢野氏

それに加えて、私は、似たような感じなのかもしれないのですけれども、感謝していたいなと思っていて、私は根岸が移住した後に移住をしたので、地元の人がもう移住者への対応とかが分かっている中で移住させていただいたので、すごくやりたいことも応援してもらえるし、住みやすい町だなと思って、楽しく暮らさせてもらっています。

そういうのがすごく当たり前なのですけれども、そういうとき、ふと、やはりありがたいなとか、何でも感謝することは忘れないようにしたいなと思って、気をつけているなと思います。

瓜生田調査官

それでは、そろそろ予定していたお時間になりますので、最後にお二人から一言メッセージをいただければなと思います。

本当に今日お話を聞かせていただいて、ぬま大学の動画もすばらしいなと思い、見ている者に訴えるというか、すごく見やすい説得力のある動画だなと思って、とても楽しそうに活動している様子が見えましたし、矢野さんにまとめていただいたように、やりたいことを応援してくれる人がいる、それからやりたいことができる、その雰囲気すごくよく伝わってきて、そういうことが大事なのだなど。やはり何かやりたいということがあっても、一人ではなかなかやりづらい、できるかなというところがあるので、それを応援してくれる人がいる、そして、やってみて挑戦したら助けてくれる人がいる、もし失敗したとしても受け入れてくれるんだろうなと思いながら聞いていました。本当に今日はありがとうございます。

最後に、根岸様、矢野様、一言ずつお願いしたいと思います。

根岸氏

これはプレゼンで入れようと思っていたのですが、時間がなかったので入れられなかったことですが、ある市役所の女性の方が言っていたことで、このチャレンジしているという、挑戦させてもらえる町というのは、今は当たり前だけれども、震災前の気仙沼がそうだったかという、そうではなかったとおっしゃっていた。それは、震災があってすごく大変なことだったけれども、その後に入ってきた移住者たちやリターンで戻ってきた人たちと一緒につくってきたこの10年の文化だと、市役所の女性の方が言っていたのが私はす

ごく印象的で、それで市役所の方たちも、自分たちができないことは民間や第三セクターに任せようと思ってきている。何かそういう雰囲気があって、もうすぐ震災から10年で、あれはすごく大変なことでしたが、気仙沼はそれだけではなかったということを地元の人たちは言ってくれていて、なのでこれから先も、すごくみんなわくわくしながら暮らしています。

ぜひそのわくわくを感じに、本当に来て人と話すとすごく分かるので、それを感じに気仙沼に落ち着いたらいらしていただきたいと思います。今日はありがとうございました。

矢野氏

私のほうからは、最後に、これからどうしていきたいかというのを少しお話しできたらなと思います。

気仙沼の中でそういう若い人たちのチャレンジが生まれていて、わくわくが生まれている町なのですけれども、チャレンジが見えてきている中で、そういう人たちがよりいろいろな人を巻き込んでその動きを大きくしていく、それが町になっていく、その広がりをつくっていくところを今後はもっとできていったらいいなと思っています。

これから、より行政と連携したり、子育てが今盛り上がっていると言ったので、そこだけではなくて、ゼロウェイストというエコなところだったり、スポーツの環境だったり、すごく広がっていきそうなテーマがあるので、そういうところから町をつくっていけたらいいなと思って、またそこにもわくわくをしていますので、ぜひ今後の気仙沼の活躍に着目していただけたらなと思います。今日はお時間をいただき、ありがとうございました。

瓜生田調査官

本当にお二人、お忙しい中、素晴らしい発表をいただきましてありがとうございました。

楽しいことばかりではなくて、いいことばかりでなくて、本当に大変なこともあると思いますけれども、これからもぜひ前向きな活動を続けていただいて、私たちも一緒に何かできることを考えさせていただければなと思いますので、これからもよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

それでは、次の講演に移らせていただきたいと思います。本日最後の講演になります、一般社団法人ふくしま学びのネットワーク理事兼事務局長、かつ福島大学特任准教授の前川直哉様による「新しい学び、福島から～ふくしま学びのネットワークの挑戦～」と題する御講演をいただきます。

前川様、どうぞよろしく願いいたします。

前川氏

皆さん、こんにちは。ふくしま学びのネットワークの前川と申します。本日はよろしく願いいたします。

早速、資料に沿って、「新しい学び、福島から」というタイトルでお話をさせていただきます。

最初に簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、現在は福島市に住んでおりますけれども、もともと出身は関西・兵庫県尼崎市というところなんです。私自身、今から26年前の阪神・淡路大震災に高校3年生のときに被災している人間です。ただ、本当にたくさんの方に支えていただいて、大学、大学院を出てから、また自分の出身校である神戸にあります灘中学校、高等学校という私立の学校の教員をしていました。その灘高校の教員だったときに、2011年の東日本大震災及び原発事故が起きます。

後ほどお話ししますが、生徒を連れて福島及び宮城の被災地を訪問する合宿を繰り返すうちに、一言で言いますと福島が好きになって、別に福島が大変だからとか、福島がかわいそうだからとか、そういったことではなくて、単純に福島で仕事をしたいなと考えるようになって、こちらに引っ越してきた人間です。

そこで、ふくしま学びのネットワークという非営利の団体をつくるとともに、いろいろな活動をしてきました。

現在は、福島大学の教員もしながら、大学の仕事とNPOの仕事を両方やっているという形になります。

先ほど生徒を連れてという話をしましたけれども、2011年の東日本大震災が起きたとき、私は神戸にあります灘高校の教員でした。夏休みに友人の教員と東北でボランティア、このときは岩手県の釜石に行ったのですけれども、ボランティアをしてきまして、その話を生徒たちにしたところ、生徒会の子たちが自分たちも何かをしたいということを言ってくれました。

実は、1995年の阪神・淡路大震災では、私が勤めていた、当時私は高校生として通っていた灘高校も非常に大きな被害を受けた学校です。学校自体が最初は御遺体の安置所になって、その後は避難所となって、学校自体もそういった経験をしている学校ですので、東北の震災が決して人ごとではなかった。

阪神・淡路大震災から東日本大震災までは16年、間が空いているのですけれども、ちょうど阪神・淡路の頃に生まれた子供たちが2011年にちょうど16歳、17歳、高校生になっていた。恐らく大人の人たちから、あなたが生まれたときはこんな地震があったんだよとか、大変だったけれども、いろいろな人に助けてもらったんだよ、そういうことを言われて育ってきた子供たちがちょうど高校生になっていたのだと思います。

そういうちょうど阪神・淡路の頃に生まれた子供たち、神戸の子供たちを連れて、福島、宮城の被災地を訪問させていただく合宿を2012年から行っていました。

これがそのときの様子です。最初に行ったのは宮城の山元であったり、あるいは福島の相馬だったりします。

ここで、訪れた先で本当にいろいろな方に温かくしていただいた。大変温かく迎え入れ

ていただいたということがやはり生徒たちには印象的だったようで、当初は2012年3月、1回だけの予定だったのですけれども、ぜひもっと続けたい、今度は後輩も誘いますから、先生、続けてくださいという形で、この合宿自体がずっと続いていきます。

最初の合宿はわずか8名で始まりました。交通費とかも生徒たちは全部自費で来ていましたから、最初は大人数ではなかったのですけれども、それがずっと続いていって、友達や後輩を誘ってくれて、今年度2020年度は新型コロナウイルスの影響で直接来るということはかなわなかったみたいですが、それでも私が辞めた後もずっと生徒たちは継続的に福島、宮城を訪れてくれています。

宮城は、先ほどお話しくださっていた気仙沼に毎年行かせていただいているのですけれども、気仙沼と福島の浜通り、そういったところを訪問する合宿をずっと続けていて、これまでに300名以上の神戸の生徒が福島、宮城に通い続けています。

私自身は、この中で2014年3月の第10回までは、神戸から生徒たちを福島、宮城に連れて行く引率教員をしていたのですが、2014年3月に灘校を辞めて福島に引っ越してきましたから、現在は引率する側から迎える側に立場が変わってこの合宿に関わり続けています。

何で神戸の生徒たちはわざわざ福島、宮城まで来るのだ。一つの大きな理由は、やはり被災した地域を実際に自分の足で歩くこと。たくさんの方の話聞くこと。どうしても、特に関西ですと、10年たってしまうとなかなか被災地の話は伝わってきません。ニュースでも本当に一部分を切り取られるだけになってしまいますから、そういったところを実際に自分の目で見て、多くの方の話聞く。それも一つ大切なことです。

もう一つ、活躍する「カッコいい大人」たちの姿を見る。これはここまでの話でもあったと思うのですけれども、被災地で頑張っておられる方、特に福島の浜通りというのは原発事故の影響が色濃くて、正直なところ、まだ被災をしているさなかで、決して過去の出来事ではないという実情があるわけですが、そんな中でも諦めずに、そして誰かのせいにする、あるいは言い訳をするのではなくて、自分たちに何ができるかを考えて、ちょっとでも現状をましな状態にしたい、そう懸命に頑張っておられる「カッコいい大人」たちがたくさんいる。そういう大人たちの姿を見ることで、神戸の子供たちも非常に刺激を受けて帰っていく。そういう非常にいいサイクルができています。

この「カッコいい大人」というのを一つのキーワードにして、本日のテーマである、私がいつも福島の子供たちと話していることですが、「なぜ学ぶのか」、そういったテーマでお話しさせていただきたいと思います。

これはNHKの福島県に限らない全国調査の数字ですが、1日当たりの学校外での平均勉強時間は、これはもうよく使われるグラフですが、この30年間でかなり学習時間自体が減っているというデータがあります。上の青い線が中学生、下の赤い線は高校生です。

1980年代の高校生は1日当たり99分、家で勉強していた。これは塾とか予備校の数字も含まれますが、学校の授業以外に約100分間、高校生は勉強していたのが、それがずっと減っ



て、2002年に55分まで減りますけれども、今はちょっと持ち直したものの66分。30年前の3分の2にまで勉強時間は減っているわけです。

こういうグラフを見ますと、なぜ日本の中高生は30年前と比べて勉強しなくなったのか。当然、こういう疑問が出てきます。実際に福島でこの話をするときなんかには、生徒たちに、何でこんなに減ったのだと思うというふうに聞いたりするのですけれども、もちろんスマホができたとか、インターネットが普及したとか、いろいろな理由はあるのですけれども、実はそういった子供たちの勉強以外の魅力が増えたことだけが原因ではないだろうと私は考えています。

むしろ、この問いの方法としては、逆に30年前に日本の中高生は何であんなに勉強していたんだろうかと。30年前を基本にしてしまいますと、まるで今の子供たちがサボっているかのような、今の子供たちは勉強が嫌いになったかのような、そんなふうに見えてしまうのですが、本当はそうではないはずだと。逆に、30年前と現在で、日本の子供たちを取り巻く環境が大きく変化したのではないか。30年で子供の性格とか気質が変わるわけではないので、逆に子供を取り巻く社会の環境のほうが大きく変化したのではないか。そんなふうに比較をしてみたいと思います。

そうしますと、30年前というのは、一番大きいのはまず受験戦争の全盛期であった。1980年代のところをここは見ていますけれども、大学進学率が今よりもかなり低い時期ですし、さらにいわゆる学歴神話、いい学校に行けばいい会社に行ける、いい会社に行ったらいい人生が過ごせる、そういった学歴神話がまだまだ生きていた時代です。

ですから、30年前の子供たちは、身の回りの大人たちに何で勉強しなきゃいけないのと聞いたら、大体答えは決まっていたわけです。何で勉強しなきゃいけないの、それはね、将来の自分のためだよ。私なんかは30年前、子供ですけども、周りの大人、親とか学校の先生に聞くと、それは将来の自分のためだよ、こういう返事が常に返っていました。

しかし、2020年、今は2021年ですけども、少子化によって大学全入時代が到来しています。1980年代、90年代に比べますと、確実に競争は緩和されている。

さらに大きいのが未来の不透明感です。今の子供たちは右肩上がりを一度も経験していない世代です。つまり、そういう子供たちに、いい学校に行ったらいい会社に入れる、いい会社に入ったらいい人生が送れる、そんなふうに伝えても以前ほどの説得力はない。

実際にいろいろな企業が大変な思いをしている。すごく世界的にも有名と言われるような企業に入っても、例えば大規模なリストラを行っていたり、あるいは海外の企業に買われたり。リストラされなかったとしても、朝から晩まで働かされる、大変な働き方をさせられる。

そういうような話ばかり聞こえてくるものですから、子供たちとしても、勉強を今頑張っても、それは本当に将来の幸せにつながるのだろうか。そういった疑問が出てくるわけです。ですから、勉強は将来の自分のためと言われてもなど、これが今の子供たちのリアルな感覚だと思います。

実際、私、福島でいろいろ学校に呼んでいただいて子供たちの前でお話しする機会が多いのですけれども、そこで必ず聞く質問があります。すごく単純な質問です。将来、この国、日本はだんだんよくなっていくと思いませんか、思いませんか。これを二択で聞くと、よくなると答える生徒はどのくらいだと思われませんか。だんだん数字的には悪くなっているというのが私の肌感覚ですが、福島に限らず他県の学校でも聞くのですけれども、だんだんこの国はよくなると思っている子供は、いて1割、大体は5%くらいです。本当にぱらぱらとしか挙がりません。ほとんどの子供たちは、よくて現状維持か、だんだん悪くなっていくだろう、そんなふう子供たちの感覚としては考えている。

つまり、そういうときに、自分のためだけ、あるいは将来のため今我慢して勉強しなさいというのはなかなかモチベーションには直結しません。結局、将来の自分と今の自分をはかりにかけたときに、将来の自分というのはちょっと自分の中で想像がしづらい。むしろ、今の自分のほうが確実に楽しさというのは目の前にあるわけですから、ですから、将来のため今楽しい自分を我慢して勉強しましょうというのは説得力がない。そういうのが現状です。

では、こうした中、どうすれば学びのモチベーションを保てるのだろうか。こういったことを私も福島で、もちろん神戸にいたときもずっと考えてきました。そのヒントになることを教えてくれたのが福島の子供たちだったのです。

それは実は私自身、阪神・淡路大震災を被災したときに経験したことであったのですけれども、結局、なぜ学ぶのか。あるいは、なぜ努力するのか。なぜ成長しなきゃいけないのか。そういうのを考えていたときに、福島の子供たちと話して、そうか、成長するというのは支えられるだけの存在から誰かを支える側の存在になる、そういうことを成長と言うのだな。すごくシンプルなことではあるのですけれども、福島の、特に浜通りの子供たちと話していて、すごくこれを思い出させてもらいました。

これをきれいな言い方で言うと、いわゆる恩返しというような物言いになると思います。震災のとき、原発事故のときにすごくたくさんの人にお世話になった。だから、今度は自分が支える側の存在に回りたいんだ。恩返しをしたいんだ。きれいに言えばそういう表現になるのですけれども、特に震災・原発事故の後の浜通りの子供たちと話していると、恩返しというきれいな言葉にしづらい、もうちょっと強い気持ちがあったように思います。それは一言で言うと、誰かの世話になりっ放しの人生は嫌だ。確かに震災・原発事故でいろいろな人のお世話になった。それはありがたいのだけれども、ずっとこのままではまずい。誰からのお世話になりっ放しではなくて、今度は自分が支える側に回るんだ。非常にそういう強い意思を感じました。

ですから、自分のためだけの勉強ではなくて、誰かを幸せにするために学ぶんだ、支えられる側から支える側に回るんだ。何で学ぶのかといったとき、それは学ぶことを通じて、まだ出会ったことのない誰かが幸せになる、笑顔になる、そういうところにつながっているんだ。私はこれを「君が学ぶと、世界が変わる！」という言葉で表現していますが、こ

ういった表現をしますと、福島の子供たちはすごく伝わりやすい、そんなことを感じています。

これが一つ典型的に出るなと思うのが、私たちがやっているふくしま学びのネットワークの無料セミナーです。これは私の灘校時代の先輩、非常に有名な英語の木村達哉先生という、たくさん参考書、問題集も書いておられる先生とか、あるいは大手予備校の先生方が来てくださって、福島県内で高校生に無料のセミナーをずっとやってくださっています。2,000名以上の高校生が参加しているのですが、実はこの先生方、皆さん交通費も謝礼も要らないよ、完全にボランティア、完全な手弁当で毎回来てくださっています。自分たちはこれでお金をもうけようなんて思っていない。交通費も謝礼も要らないよ。それも一回だけではなく、これまで14回も毎回毎回無償で来てくださっている。これはとてもありがたい話なのですが、これを子供たちに伝えるとき、こんなふうに言います。

この先生方は、毎回、完全にボランティアで来てくださっている、とてもありがたいけれども、もしこの先生たちがあまり授業が上手じゃなかったらどう思うか。毎回、完全に手弁当でボランティアで来てくれるんだけど、いま一つ授業が上手じゃない。もしそうだったら困りますよね。ある意味、一番困るパターンですよね。実際にはこの先生方はとても授業は上手ですし、毎回毎回いろいろな工夫を、いろいろなテキストをつくってくださって、それで生徒たちは喜んでいる。

そこで生徒たちは気づくわけです。そうか、誰かの力になるには力をつけなければいけないのだ。学校はそのためのいわば準備の場所なのだ。そのロールモデルとして、この高校生無料セミナー、ふくしま学びのネットワークをやっていますけれども、単に勉強法を教えるだけというよりは、そういう先生たちのカッコいい姿、そこからなぜ学ぶのかを伝えてもらう。そういう場所になっているかなと思っています。

最後に、今、福島で学ぶ意義は実はたくさんあるという話を少しさせていただきます。

先ほどカッコいい大人が集まる場所と申し上げましたが、そのほかにも震災・原発事故を経た福島で学ぶ意義はたくさんあると思っています。特に大きいと思っているのは、たくさんの課題が存在し、なおかつ正解のない問い、これを考え続ける場所、それが福島になっているということです。

今の子供たちが大人になる20年後の日本というのは、ロボットやAIが今以上に普及して、よく言われるとおり、人間の仕事を奪っていく時代だと言われています。これは今始まった話ではなくて、これまでもたくさんの機会が人間に取って代わってきた。消費者としてはとても便利になっていくわけですがけれども、その代わりに人間の働き場所が徐々にロボットやAIに取って代わられる、そんな時代になっているわけです。

そんな中、人間にしかできない仕事とは何か。これはもうさんざん議論されている点ではありますが、ロボットやAIが得意な仕事というのは正解のある問い。与えられた指示どおりに業務を遂行する。つまり、これまでの日本の教育の得意分野だった部分は、かなりロボットやAIが取って代わりやすい部分になるということです。ですから、人間にしかで

きないこととしては、正解のない問いについて自ら課題を発見し、解決策を探っていく。そういった仕事をできるようにしなければいけません。

実は、この観点から見たとき、福島の高校生たちというのは、復興であったり、あるいは地域貢献のために非常に多様な活動を展開しています。これらは全て正解のない問い、これについて自ら課題を発見し、解決していく、そのための活動です。

こういった活動をさらに活発にするために、実は私たちふくしま学びのネットワークや、あるいは福島県の教育委員会、あるいは地元メディアなどが様々なコンテストを開いています。これらはサービス・ラーニングと言われ、地域社会のニーズを前提としながら、サービス活動（ボランティア活動）を通して地域貢献をしつつ、自己肯定感や知識・技術を身につけていく。いわゆる活動を通じた学び、サービス・ラーニングという新しい学びの方法に実はなっている。これに私も気づきまして、こういった福島の高校生たちの活動をより活発にしていきたいと考えています。

サービス・ラーニングというのは、単に活動をするだけではなく、その活動を通じて学びをしていく。これまでのボランティア活動やフィールドワークともちょっと違った、新しい学びの形として世界的にも注目されている方法です。大学のほうでもこういったことをやりながら、福島ならではの学びを追求していきたいと考えています。

最後に、福島が持つ教育の可能性として、「なぜ学ぶのか」が伝えやすい。そして、「何を、どう学ぶのか」といったときに、こういう課題発見、解決型のサービス・ラーニングにチャレンジできる場所。つまり、いろいろと限界に来ていると言われていた日本の教育を変えられる可能性が一番高いのが福島なのではないか。そういった思いで私は活動しております。

このコンテストの様態などはふくしま学びのネットワークのホームページにございますので、よろしければ動画なども御覧ください。御清聴、ありがとうございました。

瓜生田調査官

前川先生、ありがとうございます。

それでは、質問の時間に移らせていただきたいと思います。どなたからもQ & A、ウェビナーではされていないようですがけれども、何かありましたら今からでも間に合いますので、御質問をどうぞお送りください。

では、事務局会場の寺本参事官からお願いいたします。

寺本参事官

内閣府の寺本と申します。貴重なお話をありがとうございます。

サービス・ラーニングを福島で実践されているということですがけれども、これは福島県以外のほかの県にも広げていくような動きがもしありましたら教えていただければと思います。

前川氏

このサービス・ラーニングの関係で、全国的なコンテストと申しますか、全国的なイベントとして非常に有名なのは、NPOカタリバさんが行っているマイプロジェクトアワードというのがございます。私もいろいろ関わらせていただいているのですが、マイプロジェクトアワードというのは、高校生たちが自分たちでプロジェクトをつくって、それについて発表、プレゼンテーションをしていくという全国大会で、文部科学省とも連携して行っている事業ですけれども、こういったいろいろな活動があります。

さらに、ボランティアのコンテストなんかも最近非常に盛んになっていまして、そこで全国規模の大会なんかも行われたりしているのですが、そういった全国規模の大会でも福島の子供たち、福島の高校生は非常に高い評価を得ている。

その背景には、今申し上げたような県内でのいろいろな活動、あるいは県でのコンテストの開催、県としてのバックアップがありまして、他県にもどんどん広がっているし、行われているのですけれども、福島はそれを県として応援していくのだ、サービス・ラーニングの先進県を目指すのだという形でやれているかなと思います。

瓜生田調査官

サービス・ラーニングという概念について知ることができました。また、個人的には、日本の若者で、将来日本がよくなると思っているのは低く見積もっても10%くらいかなと思っていたので、それより低いことに驚きました。

それではウェビナーでお寄せいただいている質問に移ろうと思います。

前川氏

そうですね。では、このQ & Aにお答えさせていただきます。

これは恐らく、勉強に対して苦手意識を持っている子供たちに学びの重要性をどう伝えるか、というお話だと思うのですが、おっしゃるとおりで、勉強について誰もが得意だと思っているわけではありません。自分は勉強が苦手だなと思っている子たちももちろんたくさんいるわけです。

そういった子たちに私は何を話すかという、決してオールマイティーの人間になる必要はないんだと。進学校の子たちは何も言わなくてもある程度勉強してくれますので、それよりはどっちかという勉強について苦手意識を持っている子供たちと話すことも多いのです。そこで伝えるのは、別にオールマイティーになる必要はなくて、全部が全部できるようになるわけではないと。

今言った続きからいただきました。勉強に苦手意識を持っている子にはどんなアプローチを行っていますかということです。まさにその話で、全部オールマイティーになる必要はなくて、これはほかの人より得意だと、何か一つでもとがったものがあつたらもうそれで十分なんだよという話はしています。例えばほかの科目は正直あまり得意じゃないけれ

ども、自分は英語だけは人よりできる、あるいはこれについてはほかの人より得意だというものがあって、それがあれば十分誰かの力にはなれる。

正直、いわゆる大学入試とか受験で受かりたいというのだったら、それはそれなりに平均的に上げていく必要はあるのかもしれませんが、将来誰かの役に立ちたい、力になりたい、そこを目標にすれば、そんなにオールマイティーに全部が全部できる必要はないわけです。

ただ、苦手な科目のほうがちよっとやったら上がるとか、そういうコツなんかは伝えたりはしますけれども、基本的に子供たちに話しているのは、完璧を目指す必要なんて全然ないんだ、これだけはほかの人より得意だぞ、そういう武器を持てるようになるといいね、そういうふうにお伝えしています。

瓜生田調査官

私から一つ、そろそろお時間なので最後の質問になるかと思えますけれども、以前、灘校にいらっしゃったということで、福島にボランティアに生徒さんを連れていらっしゃったということですが、ボランティアの意識が高いのは阪神・淡路大震災を経験されているということで生徒さんが応募されたかと思うのですが、その方々はその後、やはりそういう活動に従事されている、もしくはその経験を生かされてご活躍されているなどのお話があれば御紹介いただければと思います。

前川氏

実は、灘校の子たちは毎回合宿に来てくれるのですが、帰って神戸でそれを伝える活動を割とやってくれているみたいなのですね。それは彼らが福島に来たときに聞いた言葉が実は大きなきっかけになっています。

震災直後、もうあまりボランティアがない状況で、私たちに、僕たちに何ができますかと聞いたときに、知ることが一番のボランティアなんだよと。実際に今福島状況について、それをみんなが知ってくることが一番のボランティアなんだ。「知るボラ」という言葉を使ってくださったのですが、その話を聞いて、なるほど、だったら自分たちは知るボラ、そして「伝えボラ」。神戸に帰って神戸の人たちに福島の現状を伝えていこう。そういう活動を文化祭の発表であったり、あるいはクラスのほかの子たちとか、そういう身近なところから伝える活動をしていています。

瓜生田調査官

ありがとうございました。

それでは、そろそろお時間になりましたので、ここで前川先生の講演のお時間を終わらせていただきたいと思います。

前川先生、最後に何か一言もしあるようでしたら、メッセージをお願いいたします。

前川氏

先ほどもお話ししましたとおり、「ふくしま学びのネットワーク」で検索していただくと、YouTubeの動画というか、コンテストの動画がありますので、よろしければぜひ御覧ください。ありがとうございます。

瓜生田調査官

お忙しいところ、どうもありがとうございました。それでは、前川理事の講演を終わらせていただきます。

最後に、この研究会自体の閉会の御挨拶をさせていただきます。講師の皆様、それから最後まで御視聴いただいた皆様、ありがとうございました。

本日、いろいろお話をお伺いできまして、私どもの行政、内閣府での仕事に生かせることも当然たくさんありましたし、私自身も生き方を考えさせられるお話が多かったなと思います。本日のお話の概要、資料につきましては、後日、内閣府のホームページに掲載いたします。

また、次回の宣伝になりますが、第3回の「子供・若者施策調査研究会」については、「Child-Youth Tech (チャイルド・ユース・テック)の展開」というテーマで、3月16日火曜日午後2時からの開催を予定しております。後日御案内いたしますので、よろしければぜひ御参加ください。

それでは、これをもちまして閉会とさせていただきます。御参加、どうもありがとうございました。